

捐資節中、恩晴中道絶へて見えてゐる。此曲・班女に、吉田少將と花子との上に、扇の事を作つてゐるのも、班婕妤の秋扇の故事に據つたものである。開の扇は班女が云、半臂に見よ。
はんび 坂田の公時兼の役、半臂に腹巻・烏帽子懸けし(開八州)

〔半臂〕古昔、束帯の時、袖と下駄との間に著る兩袖のない短い衣。遷任後名類聚抄に「半臂。衣名也、按釋名有半袖、其袂半袖而施袖也、後世半臂始其遺、事物紀原實錄曰、隋大業中内官多服半臂、除却長袖也、唐高宗減其袖、謂之半臂、今背子也。」

はんぶ 髭籠に籠めし祇園坊、はんぶ御殿負、弓も引き方靱の客といふもあり(酒呑童子)

〔半分〕一寸の半分(一寸)の義で、勳銀五分なる下位の遊女をいひ、この贅笑婦をわけても稱す。「わけを見よ。」

はんべ 吳服屋の手代半兵衛は彼の池田屋の小菊にたんと金入なれば(水朝日)

〔半兵衛〕傳奇作書附録中の巻、心中情死人名録の中に、小菊半兵衛の名が載せてある。蓋し吳服屋の手代半兵衛は池田屋の遊女小菊と馴染み、主家の呉服物を取出して費用に充て、情交を續けてゐたが身もちどころなきに至つて、遂に相共に死に伏して情死した者である。

はんびー東山の大字

専ら布團の中などに入れる。「はんやの如くなる」とは、身體甚しく疲勞して髪毛の如く手ごたへ無くなるをいひ、井原西鶴撰日本永代藏巻四、祈る印の神の折敷の條に「奥の寢間に入りて重ね蒲團釣夜者、はんやの栞枕に身がこそはく。和訓栞に「はんや。斑枝花をいふ鬚鬚なり、云云。」

はんやみやうり 佛神三寶・番屋冥利、何事も隠さず勿論他言致すまい(扇八景)

〔番屋冥利〕番屋者のいふ自誓の詞。「けいせちみやうが」の條を見よ。

ひ 非の入りさうな事どもを言ひくろめたる情のほど(安殿切) 大概ひの入りぬ程の御用の間には合はせませう(鐘權三) 小松殿さへひを入れ給はぬことを、田尻文官の和主理が嘲るは(何事ぞ(五人兄弟))

〔非〕理ならぬこと。疏。非難。淮南子に「蓬伯玉五十而知四十九年非」。

ひあふぎ 縦、南天に小手鞠に、いと男とひあふぎの(生玉)



〔千射〕

は黄色で濃色の斑點がある。この文は「射干」に「日に逢ふをいひかけたのである。ひうち 冬編笠も垢張りて、紙子の火打膝の皿、風吹き凌ぐ忍ぶ草(夕露)

〔火打紙子〕などの袖の附根の腋下の所に縫ひ附ける火打膝の形したる布切れをいふ。この文は、火打膝と同じ頭語をいひつづけたのである。細伽名題紙衣(元文三年刊)に、「今著てある破れ紙子の古火打、うたれど向脇から火がふり」。「膝の皿」をも見よ。

ひがひ 彼のひがいすな小男をおのれが大きなくばびらでようもようも蹈みをつたな(曾根崎)

〔ひがへす〕「ひがやす」といふ。捜せ細つて弱弱しきをいふ。人を其姿によつて蟲または魚などに譬へていふ語が往々ある。「ひがらす」といふ語も捜せて見える魚の名「ひがいら」から出たものであらう。山崎美成編・海録巻十九に「ヒガイスと云ふ詞。波海魚譜云、ヒガイス、漢名未だ詳ならず。鯨魚の類なり(云云)〔頭書、カマツカ〕一名タケノ、スナ(アキ、ダンキボウ、又名鯨魚なり)肉性味鯨魚に同じ、食法又同也、其形瘦て骨高きを以て、土俗の謔に病人をヒガイスと云、この魚譜は渡邊暎輔作なり。馬守部の俗語考に「ヒガイスと云ふ」。

ひがきづくり 沖に何待つ檣垣造り十四五反の廻船に、船頭舟子は襖袍着て(博多)

〔檣垣造〕兩段に檣垣を組立てた大船をいふ。和漢船用集巻四に「檣垣。攝州大坂廻船問屋の仲間船を云、六七石以上皆大船也、垣立の筋を檣垣とする故の名なり、今檣垣と呼て舟舟の名とす、すべて大廻し荷物を含むいへども、多く酒樽油桶類を積むゆゑ舟舟と云ふ(開八州)

云、是又舟舟の一法也。
ひかけ ひかけの師匠を重んじて、半里餘を夫婦づれ夜な夜な見舞ふぞ殊勝なる(反魂香) 日蔭者の曾我が姉御勤氣者の末などと(會稽山)

〔日蔭〕世を擇りしめて居ることを、零落して籠居すること。ときめくこと、反對。

ひがしや 氣立の好いひがしやかせぬ太夫を頼む(酒呑童子) 心底が語りたま傍へ寄れば、ひがしやかと拗言のあるでう、安堂寺町とは何事ぢや(今宮) 好い男さへ稀なれば、少しよめなる女房のひがしやかぶるは科ならず(薩摩歌)

〔ひがしや〕「ひがしや」といふ。按ずるに「言字考節用集」に「関内」に「ヒカヒカ」に「ヒラ」の兩條に振假名を附けてあるやうに「ひがしや」といふ。「ひらしや」といふ。その條ともなつた語であらう。

ひがしやまどの 師匠市之進一流は東山殿より嫡傳、一子相傳の大事なれば(鐘權三)

〔東山殿〕足利將軍義隆をいふ。義政が茶道に堪能であつたことは人の知る所である。
東山の大大文字 毎年七月十六日東山の大大文字、都では珍しからず(開八州)

也、又云弘法大師之所書也、新説近是、凡此月六日、伐薪木至點火、預其事者有數千家、今日申刻各携所伐之薪木、互携之登山上、凡大文字一畫長百五十間餘、其中間隔五尺許、種新木一把、其數四百八十餘所、各積薪、後待三日、同時點火、是亦洛陽之壯觀也、云云。

*ひかへ ながしの松は深緑、じつと控の若緑(聖徳太子) 笑顔ばかりの梅櫻、流し控の院合(孕常盤)

〔控〕立花の流し控をいふ。立花時勢姓八に、立花龍傳抄之五。控枝は七つの枝の外なり、出し所は講と流し枝との裏中より出す、講の方おき時はおもき物を用ひ、かるき時はかるき用ひ、是左右の輕重をはかる物なり。しやうじんの條の圖を見よ。

*ひがへす 聞及うたよりひがへすな弱さうな風俗で(弘徽殿)

〔ひがへす〕を見よ。

*ひがやす サアおのれ在所へ駕籠で送らせんと、ひがやすな與兵衛を引立て(卯月紅蓮)

〔ひがやす〕を見よ。

*ひかるげんじ 光源氏は敷島の歌道の傳授と聞えたる(雪女) 五條わたりの黄昏に光源もじ御げんもじ(大原問答) 雪の下の長明屋敷當代和歌に名を得たる、河内の守光行が光源氏の講釋場(長明寺殿)

〔光源氏源氏物語の主人公で、光君ともいひ、桐壺帝の御子であつて、あてやかに此世の人とも見えぬ程であつたによつて、相人めでつて光君と名づけた。帝の皇子を源氏となすべくおきて給うたこと同書、桐壺の巻に見えてゐる。よつて源氏物語を光源氏物語

ともいふ。雪女五枚羽子板のこの文は、河海抄巻一、料簡の文中にも「俊成卿六百番判詞にも、源氏みざる歌よみは遺恨の事なり、……尤も和歌の奥造なるものなり」とあるに據つたのである。

〔光源もじ〕は、光源氏の文字詞に見文字「ごけん」を見よをいひかけたのである。「夕顔の花を遣る五條わたり云云」を見よ。

最明寺殿百人上高のこの文にある長明は鴨長明のことである。長明は雪の下(その條を見よ)に居たことではないが、後鳥羽上皇に召されて和歌所の寄人となつた人。また河内守光行は、光源光行のことで、後鳥羽上皇の御遇を被り、正五位下に叙せられた人で、其著述に源氏物語を註釋した「水源抄」がある。近松がこれ等の文によつて書いた諸語の筆である。またこの後の文に「佐野の源左衛門常世が扇歌は花すき者の跡ぞと」といへるも、謡曲・鉢の木に「某世にありし時は、鉢の木に好き歌多木を集め持ちて候ひしを云云」とあるに據つた諸語の筆である。

*ひきこなす 小姑をひきこなした、眼をあいておつしやれとは何ぢや(持統天皇)

〔ひきこなす〕を見よ。

*ひきび 三年を十二兩・一年半は勤める、残つて半金六兩なれど、ひき日の何のとしてつきり七兩は入りませう(永朝日)

〔引日〕身揚るといふ。遊女が勤めを休んだ日であつて、その日の揚錢を見積つて抱入の借金中に加へられたものである。「みあがり」を見よ。

*ひきふね なうあれを見や、中から提灯引舟まじくら、禿が諺うて客

送る(徒鯉) 引舟がぶる遠慮なく、ムム節歌に諺ふは婆のこことか(露門松) 戀路の闇の一寸先、見えぬ所を傍から見て、買手の御身もすたらす、女郎もはばきやうに舵を取るが引舟(反魂香)

〔引舟〕大(遊女)最高位のもに附隨する鹿野女郎(かこひ)をいふ。蓋し大夫を大船に喩へ、大船の引つれる舟といふ義よりの名である。引舟は扇屋の夕霧が諸方から客に招かれるので、自分が座に出るまでに鹿野女郎を扇屋へ遣つて座を持たせたり始つたものだといふ。日本好色名所録(元禄五年刊)に「太夫揚銀五十八匁、外に引舟ときはまつて鹿野女郎一人づつ連る故、此代十八匁合せて七十六匁。俳諧道言に「引舟。大夫に付、太夫は大船に表し、繋げる舟の心に、それを綱す故引舟の名あり、勤はせず内證なり」。

*ひきめ えたりやおうと矢叫の聲、暮目は御殿の楡皮にとまり(絶好)

〔暮目〕暮まを略した語。木の皮を造り、長さ四寸、太さ五寸はり程で、中空虚にして、孔を三つまたは五つ穿ち、鏑のやうに鳴り響く鏑である。

*ひきわたし 式三献の本式の、まづ初献は引渡し、老海風・海月・打鮑(國性爺後日)

〔引渡〕本膳に「類聚雜要に引渡とみゆ、大膳禮に二膳に盃三つすわりたるを引渡しといふなり、二膳をちみといふ、三膳をわたりといふと見え、又引渡は草なり、眞を式三献といふ、世におちつきといふ也とも見えたり、又うちみといふは鯉のうし身をつくりて盛り、わたをいりといふは小鯉を頭をはな

しすきて、わたをいりて上に置て出す也といへり。 それに何ぢや、よい年して長屋へびくにん引入れ、日が暮れると濱せせり(夕霧) あたまわり十文出し、びくにん呼んで念佛講(吉岡染)

〔びくにん〕比丘尼に撥音、んの増加した語。安原貞寂撰かた言(慶安三年刊)に「比丘尼をびくにん」とうたびくにんを見よ。

*ひぐらし つづりさせてふきりざりす、ひぐらし憎や我ならで(弘徽殿)

〔孝御婦〕一種で、小さく其色青黒である。夕暮方にカナカナと鳴くによつて「かなかな」といふ。和名抄に「爾雅註云、孝婦一名鶯、和名比久良之、小青婦也」。

*ひぐらし 落ち人の身に業平は、墨の衣に投頭巾、見る目忍べば日ぐらしや、人を勧めの歌念佛、修業の僧に身を篋し(井筒)

〔日暮〕日の暮れに、日暮つをいひかけたのである。説經節の太夫は代日暮某と名乗るによつて日暮坊といひ、また歌念佛(その條を見よ)は説經節を語つたものである。

井原西鶴撰日本米代藏(寛享五年刊)巻三、世はぬき取の親昔の眼の條に「歌念佛の日暮」と云は、むかし伏見の御上代の時、諸大名の御成門前をならべてかかやき、……、彼京の鐘たつき孟蘭盆の比喩進にまはりしが、……、それに心をとりたれ、是に目やれとおぼし、實秋の白のならひに、はを暮れておどろき、願ひ此功德空袋かたげて都に歸るを見て、人申ならはして日暮坊、其すゑす五今に名たかし」。

二九六

*ひくわん 今は大津松本に旅人を宿す旅籠の營致し家子ひくわんも多数多遣ひ(殊靜)
〔被官其人について官職を被る義、附屬の官をいふ。轉じて奴婢をいふ。〕

ひけい 貴殿の御ひけいにて勅勤なけるさるも(反魂香) 空海の御ひけいにて御前を申し直さるると聞き(以呂波)
〔庇惠)庇護)庇惠。庇護。おかげ。堀河夜討舞の本)上卷に「御馬などや候らん、御ひけいあれとぞ申しける」。

ひげい 四番には竹の下の孫八、これいも同じく雉子の尾の長柄の鏡にて突止めしを、そのまま振らす鏡持の、ひげいしてこそ通りけれ(本領曾我)

*髭切膝丸 頼朝が重代ひげきり膝丸にても望めとある(百日曾我) 首を討つ餘りの鏡、風に散る髭を切り兩膝にかけて落したること日本無雙の名劍、名は體をあらはせば則ち髭切膝丸と名づくべし(堀山姥) 源氏重代の名劍である。按まぢまぢである。即ち髭切膝丸を劍の名とし、或は膝丸を鏡の名とし、または髭切と膝丸とを二劍の名としてある。堀山姥の文によれば、果林子は髭切膝丸を劍の名と見たのである。保元物語卷一、新院爲義を召さるる條に「過ぐる夜の夢に、重代相傳仕りて候月かす、日かす、源太がらぶぎぬ、八龍、濃濁、薄金、たてな

し、膝丸と申して八龍の鏡候が、辻風に吹かれて四方へ散るとして侍る間、かたがた帷り存候、...此膝丸と申すは牛千頭が膝の皮を取り綴したりければ、牛千頭や入りけむ常に見て生をきらひけるなり」と見えたる。この膝丸は鏡の名である。平治物語卷一、源氏勢次郎の條に「さて髭切と申すは、八幡殿貞任宗任を攻められし時、度度に生捕りもの十人の首を打つに、皆髭にもに切られければ髭切とは名づけたり、奥州の住人文壽といふ多く劍あり、所謂寶劍十柄、髭切、膝丸、小鴨なり、髭切膝丸と申す二劍の由来を尋めれば、云云。

*ひげこ 金糸の網をすきかけて鬚籠に籠めし祇園坊(酒吞童子) 〔髭籠〕竹の端を編み残して鬚のやうになつてある竹籠。源氏物語浮舟の巻に、「ちひさきひげこを小松につけたる。和訓栞に、「ひげこ。源氏枕草紙大和物語にみゆ、鬚籠なり、竹のかだまをいへり」。

ひげなが 髭長なげにせせばん、もうもどあぐるぞ(浦島) 〔髭長〕髭をいふ、二對の觸角長くして髭の如きによつての稱。

ひげらかす 周日のよい京上蕩をひげらかすに來たか(女夫池) 〔女夫池〕太鼓による獅子舞の條に「色ある娘は母の髭ひげらかして、花は見すに見られに行く」。

ひごするき 平野菟弱、ひしつむぎ、ひらのやみきやう、肥後するき(重井簡) 〔肥後芋莖〕肥後に産する芋莖をいふ、刺戟性あるを利用して淫薬となす。柳澤里恭撰「比

止里爾下巻、禁衛の大事の條に「ひごするき」を擧げて淫薬の名としてある。

ひごづらふ 今日から三日ひごづらふ摺(露門松) 〔ひごづらふ〕の約。拉する。つかむ。文選に「摺をひごづらふ」と訓み、名義抄に「摺ヒゴツラフ」。果林子のこの文は、彦彦の頭、鬚、ひごづらふを用ひ、更に「摺んだ」と異音同義語を重ねて、後の「くるり」と「ひごづらふ」といふに倣ひたる。古院本には「ひごする」の假名になつてゐる。

*ひごふ 只今非業に死なんとは思ひも寄らず(歌念佛) 親父殿にひごふた金を出さずするが笑しきに、こなたな虫腹でせつそや(女殺) 〔非業〕業因に非ざるをいふ。「非業の金」とは道ならぬ金の意で、與兵衛が放蕩の借金なれば、與兵衛の金で拂へば業因の金なれど、何にも知らぬ親父がこれを拂うては、親父は非業の金を拂ふことになる。

*ひごほてみ 浦島と神代の彦火火出見の古と二筋かけて釣の縁(浦島) 〔彦火火出見〕瓊瑤杵尊の第三子である。一日兄火照命の釣具を借りて撒に出られたが、一魚も獲ないで釣竿を失はれた。兄の命より釣具を催促され二困り、海邊にけんであられた時、鹽土神來つて尊を舟に乗せ海神の所に至つた。乃ち海神の女婿玉姫を嫁られたこと古事記に見えてゐる。

*ひさうひひさう 雲にもはれ地にも入れ、非想非非想他化自在六欲天も高からず(日本武尊) 天に昇らばひさうひひさうてんまで追掛け(用明天皇)

〔非想非非想〕非想非非想天の略。有頂天とも云ひ、無色界の第9天即ち三界の最高所にある。本記卷十六、小氣與菊地合戦の條に「其降天非非想天、非非非非非天までも聞えずとんと聽し」。

*ひさかたの 空にまばゆき久方の光に映る我が影の(曾根崎) 〔ひさかた〕は「ひさかた」の義で、太陽の形を喻へた或は日差す方の義ともいふ(こと)から「ひさかたの」という日の批詞となり、轉じて天、月、雨、雲などの天象の物に冠せられた詞である。「久方の光」はひさかたの日光といふを略したものである。古今集春部、紀友則の歌に「ひさかたの光のひさかたの日に、しづ心なく花の散るらむ」。

ひさくら 因果の焰火櫻の、花の命も盛り一時(弁舟) 家櫻伐りくべて火櫻にならず悲しき(最明寺殿) 〔排櫻〕松岡空達撰「櫻品」に「排櫻。恰顔齋曰、或は火櫻に作、排も火も赤の義なり、千瓣小輪にて葉長く垂がる、開かざるときは甚紅也、開て色淡紅也、紫の菊に甚似たり、甚是に似て白少し紅盤有ものを藝花園に楊貴妃と云。蓋し類二種也」。果林子のこの文は、火に排櫻をいひかけたのである。謡曲「鉢の木」に「家櫻伐りくべて火櫻にならず悲しき」。

ひさくりげうま これこそ五十三次を居ながら歩むひさ膝栗毛馬(舟波與作) 〔膝栗毛馬〕略して膝栗毛もいふ、膝を以て栗栗毛に代る義。長道中を徒歩すること。徒歩旅行。

*ひさつ 己れば最前關東の飛札を讀み(善齋本記) 〔飛札急報〕飛脚に持たせて送る急用書。

ひさつき 滋茶一服献上と志し、千

ひくわん——ひざりき

二九七

の利休が手前を頼みこれまで召具し候と、御膝突を奉れば(三國志)「膝突半疊の薦であつて、膝を突いて坐する歌物。安齋隨筆、卷四に「膝突。たとへば半疊の如くなる物なり、公事を行はるる日大臣上卿などの假に膝を突きて坐する歌物なり、古書にヒザツキに靴の字を用ひたり、然れども誤なり、字彙に靴施職切襪軍前横木可憑者とあり、此字をヒザツキに用ふるは誤なれども久しく用ひ來り云云」。

ひざのさら 紙子の火打膝の皿、風吹き凌ぐ忍ぶ草(夕霧) 膝の皿に火がついたらば御しんだいの妨げ(重井簡)

「膝皿」膝蓋骨。但言異質、膝蓋の條に「阿波太古、墨染、今膝皿と云、蓋瓦皆カハラと訓り、即皿の意也」。

ひさまつ 油しめ木の音に聞く、おそめに染めし久松げ、いつの時雨の一雫(今宵)

ひざまる 「ひげきりひざまる」を見よ。
ひし 頼もしだが身のひしで、騙されさんしたもなれども(曾根樹)いとらしい人の身のひし、一門中の憎しみを受け、御馳走が身のひしや、酒盛つて尻踏まれた(今宵) 切つて誰が偽、遣手には利はなし、腹立つる程我が子のひしと急き立つ心押しづめ(酒呑童子)

ひし(拉、應)義。砕けること。破滅。河内名所(延寶七年刊)五の巻に「おのづから子の身のひしと成りぬべし。親はふかうの(野探)

の池に遊ばば、伊達邊五人男(寶永四年刊)卷二に「躰算まで幾度も丁にあたるは瀬川が身のひしげ算」とあるひしは「ひし」を活用した語である。「御馳走が身のひしや」とあるは、「ひし(拉)キ」に「躰屋」をひかけたのである。

ひじ 何ぞ一種で非時をせい(薩摩歌) 齋にこそ外れたれ、非時を食ふと飛掛り(國性齋)

「非時」非時食の略。午後に食を取るをいふ。釋林象器箋に「老學雜筆記云、佛經戒比丘非時食、蓋其法過午則不食也、而置佛招客草食、謂之非時」。國性庵合戦のこの文は、非時を食ふに手漕方を殺すべきさせたのである。

ひしぎ 神樂をさまる太鼓の頭、笛のひしぎに若宮は、わつとばかりに御目を見つめ、御息絶え入り給ひけり(松風)

神樂能懸などで、出陣次第一際等の鼓を打ち出す懸の相圖、または舞の轉換句切の時に、鏡く吹く笛の音をいふ。蓋しその音強烈なるに、懸の義の名であらうひしる。をもいふ。但言集に「ひしき。笛の音にあり。(松風)松雨東帶蓋のこの文に、「ひしき」ひしき(書)とある本あるは、古院本の字形相似より誤つたものであらう。

ひじきも かくく刈藻は、かだめ甘海苔春も又(出世景清) 海人のみるめのひききも(大鑑冠)



【むきじひ】

藻で食用となる。和名抄に「尾尾菜。比須不毛」。伊勢物語の歌に「思あはば律の宿にねもしなむ、ひじきもには袖をしつめ」。

ひじこ ひよこ、ひしこ、ひとも(重井簡)

「鰻魚」京阪地方にて、小鰻を鹽漬にしたものをいふ。鰻頭本節用集に「鰻魚。田官仲宣撰、徒然隨筆に「京橋にて小き鰻を鹽に漬したるをひしこ云、東都にては小き鰻の生なる物をひしこ云、又は鰻ひしこといへるもの古よりある事久し、これは鰻の誤訛か、鰻ひしこより鰻ひしこと轉じ、東都のひしこは干子より轉せし名歟」。

ひしつむぎ 平野菟蕪、ひしつむぎ、ひらのやみきやう、肥後芋(重井簡)

「菱細」甲斐國より産出する袖の一種の名。日本鹿子(元祿四年刊)に、甲斐國の産物を擧げたる中に菱細が載せてある。好色伊勢物語(貞享三年刊)に「好色男ありけり、下女しけるもの許にひしつむぎといふ物をやるとて、思ひあらば六斎宿にねもしなむ、ひしつむぎをば袖にしつめ」とありて、「ひしつむぎ」編なり、さきさき女にはかかる物に限らず、帯、きんぎょ、帷子など縁のよすがに送る常の習ひなり」と見えぬ。

ひしめく 請人に預けての拵上げてとひしめけば(大鑑師) 所詮うねめを掲めて瀬踏をさせんとひしめけども(佐佐木)

【善】ひしひしと音立てて迫め騒ぐ。書言字考節用集に「聞」。

ち(女備)

「毘沙門立毘沙門天王の立てる姿勢をいひ、仁王立と同じ類の語である。

ひしやらほろみ 萎れ出でさせ給ひける、ひしやらほろみぞ哀れなる(三國志)

ひしり 唐のひじりの宜く、色の徳には隣あり(重井簡) 御法の敵と身はなつて、今このひじりも同じ恨みに苦患を見せんと(天神記)

「聖萬葉集」日知と書き、日知を知る義といふ。聖人。聖信をいひ、轉じて信をいふ。「唐のひじり」とは支那の聖人孔子をいひ「色の徳云云」はその條を見よ。

ひじんざ(蝦山遊)

「美人草」虞美人草の略。麗春ともいひ「ひなげし」のこと。

ひすい 此ひすい人心、かたりのあるまい、のでもなし(花柳)

「閉心のねぢけたるをいふ。よつてまた狡猾なるをいひ、禽獸鄙劣なるをいふ。和訓栞に「ひすかしま。閉字をよめり、……今俗ひすといふ此義なるべし、志氣の義といへるはいが待らん」。安原貞貞撰かた言(慶安

りうつすとも、この思をばよも知らじ(重井簡)

〔飛騨鎌山本飛騨源清賢をいひ、手妻人形操の名人である。堂大門扇舖(寶永二年刊)に「かくくり細工はおや五郎兵衛其子山本彌三五郎これを傳へて無雙の名人となる、一筋の緒を以て大山を動かせ、小刀一本を以て形ある物を作りてこれをはたらかしむ、別て水鏡の術を得、水中に入て水中より出るに衣服を濡さず、繰なる狭箔に舟を仕込み川水に浮けて用を達す、此儀觀聞に達し禁庭に於て細工の術を觀覽に備へ、則細工人に仰付けられ山本飛騨源清賢と受領し、翌年雨龍の細工を差上げ河内藤に重官任せらる。異林子のこの文は、袂の壁下に飛騨操をかけたのである。〕

＊ひたひたれ

懐より髮剃二挺取出し、これがかか様の額たれとて譲りなり(卯月紅葉) あんまりよい月影に額たれうと思つてと、紛らかせば打笑ひ(重井簡)

〔額垂額を剃る小形な剃刀をいふ。「たれは剃の義、剃といふを思んで垂といふたので、元服の時髪をそるといふを思んで髪をはやすといひ、臍緒をきるといふを思んで、臍緒をつぐといふの類である。「額たれうは額剃らうの意。女軍實記(元祿十五年刊)卷一、大和言葉の條に「かみそりはをけたれ」〕

額に毛抜も當てる者 命を捨つるは世の習ひ、それに悔みは残られねど、額に毛抜もあてる者、見世の前で晝日中、町の衆・道行く人・友朋輩も見ろぞかし、丁稚小者をするやうに曲もない打擲き(永朝日) 生臭い男呼はりおけおけ置いてく

れ、額に毛抜も當てる者がいとしばげに女郎衆いちづつて何の男(霞門松)

額に生ずる髪を鑷て抜つて美容をつくる者。この當時の若者は額の髪を生際を角張つて別込み(即ち角前髪)にし、鑷て髪を抜いて額をつくつたものである。元祿御衣(元祿十五年刊)卷一に「額にけぬきを當て、髪に加鑷を引くほど若者ども打寄りし。女は眉毛も鑷て抜取つたものである。分里體行脚(正徳六年刊)五之卷に「例の夜又どの笑の肩に鑷もせず、ならず鬚の髪につげの小髭もさまで」と見えてゐる。

額にも入れた者

在所へ戻せ去せとて、額に角も入れた者、丁稚小者はいふ如く、内の手代や庭賣の侮り者になはせて(卯月紅葉)

〔角前髪をいふ。世間子息氣實(正徳五年刊)卷之三、簡略は世帯樂聞き過ぎた始末形氣の條に「角入れぬ先に喝を出せと、此度は主人方から喝をたまはり。』

びたひらな

親物左衛門吟味強くて、京大阪でびたひらなな我物で我儘ならす(博多)

〔鑑片半經鐮の「鏡半鐮」もびひらななとの條を見よともいふ。「ひらなな」の「ひら」は、片または枚の意、薄く平たいものをさす。物數部呼詞。「なか」はなば即ち半分をいふ。〕

＊ひだるし

ひだるくば木の實でも拾うて食へ(浦島) 乾乾の饑であらう。饑をいふ。ひもじ。西鶴撰本朝二十不孝巻一、慰改めて嘶の點取の條に「二日め食はねば爲飢し。和訓栞に、

「ひたるし。武備志に肚饑の字を譯せり、腹の乾たる意なるべし。』

びちうてん 三日八臂摩羅首羅天。毗紐天・加比羅天(用明天皇)。〔毘紐天梵語 Vajra。那羅延天又は自在天ともいひ、智度論二に「四臂披貝持輪輪金剛」と見え、玄應音義二十三に「此天有大威徳、乘金剛鳥行、行時有時輪以爲前導、欲破則彼無有能當也」と見えてゐる。〕

ひちがさ 「われはまた賤の男が云云」を見。ひちやうばう 費長房は鶴に乗り(國性律師後日)

〔費長房〕東漢時代汝南の人。仙翁に遇つて仙術を學び、辭し去る時に竹杖に乗つて歸つたといふ。下學集に「費長房……長房乘杖須臾來歸、自謂去家適經旬日、已十餘年矣、即以杖投隙、顧視則龍也。』この文に「鶴に乗り」とあるは「杖に乗り」の誤であらう。

ひづ 袂露けくひぢまざる(盛久) 身は村雨に袖ひちて涙にしぼる頬冠(鶴吞童子)

〔漬〕浸す。濡れる。伊勢物語に「淺みこそ袖は濡らめ」。古今集卷上の部の歌に「袖ひちてむすびし水のこほれるを云云。』

＊ひつき 藤氏の御方に日嗣の玉の男子親王やすやす降誕あり(松風)

〔日嗣〕天皇の御位を申し奉る語。蓋しその先は天神より出でて日神とあが奉るることなればその日神の位を嗣ぎ給ふ意である。「日嗣の玉の男子親王」は儲君のことである。

ひつきき 二つき髪を二つ折ま 二つ髪しどもなく、物體こぼす 道中に雪の素足の花踏むや(三世想) 「ひつきき」は引抜である。ひつきき髪を二つ

折とは、梳いた頭髪を髪櫛を出さないでその端二つ折にした結髪である。これに櫛を二枚挿したもので、この當時の結髪ぶりである。

ひつしき 牛若が引導つてき成佛せよと拜打ち、頭より引導つてき成佛せよと拜打ち、頭より引導つてき成佛せよと拜打ち(鳥帽子折)

〔引敷腰當をいひ、敷敷の如く作つた虎皮(虎皮など)に緒を附け、後腰に當てて緒を結ぶもの。〕

未の初春 昔曆新曆當年未の初春(大經師)

〔昔年未の初春〕とあるは、大經師昔曆の上演された年を云うたものであらう。而るに外題年鑑にこの上演を寶永三年九月としてある。寶永三年は丙戌に當り、未の歳ではない、その前後の未の年は元祿十六年と正徳五年とである。大經師昔曆の圓熟せる文章や、またおさん茂左衛門の三十三年忌が正徳五年に當る點より考察して、この作の上演は正徳五年と見るべきであらう。

びつしやりばん 我等がしよさいびつしやりばん、御法度背きしはいつそてんぼの皮巾着、お根付衆に告められ括られました(女備)

〔しよさいばん〕とあり、叩き附けるさま、又は動きのとれぬさまに、好色一代女一の巻に「願……この頭つら、びつしやりほん」と叩き立ちにして行く。曾根虎が願に「集體をきんてにせがまて、びしやりほん」とこなりはつる。霞門松上巻に「頬がまらびつしやりとみしらせ」。異林子のこの文は、動きのとれぬさまに叩き附し、そして「てんぼの皮巾着の條を見よ」に皮巾着をいひかけて、「お根付」をもちつたのである。〕

*ひつしよなし

口惜涙ひつしよなく、梯子とんとん踏鳴し駈下りて(萬年草) 積る思のあら糠をたつた一夜の笹にかけ貰ひない、からうす様と抱付けてひつしよなく振放し(日本武尊) 早乙女ども御前へ参れと呼ばれば、ひつしよなり振早乙女の手足も土に平伏せり(女護身)

「ひそなし」(鶴無)の訛。和訓栞に「鶴の字は多く誤解に用たり」と見えてゐる。俾らぬ。遠慮齋もなし。容赦もない。伊賀越道中巻六、郡山屋鋪の段に「誰ぞ羽織持て来いと言は先から心得て、勝手買入し女房の徳、氣轉利かして後から着せる羽織をひつしよなく、エ子供ではないわい、差出女め彼方へ行け」と。現今も福井縣遊藝郡地方では、「ひつしよけなし」を容赦ないの意に用ゐる。

ひつそばむ

神佛のあてがひかと戴き戴きひつそばめ、立つて見ても後より又誰ぞ来るやうで(淀織) 「ひきそばむ」引削の音便。削へ引寄せて隠す。源氏物語・松風の巻に、「ひきそばめて急ぎ書き給ふはかしこへなめり、そばめこそまやかに見ゆ」。

ひつたきや

名のみ異なる西天竺、呉竹なしちといひ、ひつたきやとは青柳の、翠は同じるには(柳迦) 梵語 Hitaka, (= A child, the young of any animal) 小兒の義。近松のこの文は、龜をまかせて、「ひつたきや」が「みどり」

兒の義なるによつて、みどりを翠に取つて、「青柳の翠」といひつづけたのである。なほこの文に「吳竹をなしちといひ」とある。「しそ」は、梵語 śāśhiṇī (竿の義) のヤの脱落した語であらう。

*ひつたり

思ふお敵なれば近きと、飛びかかりひつたりわるとやれ、ごんせと止めたる女景清(天網鳥) すき間なく合ふまにふ副詞。ここの文は、客に飛びかかりひつたり寄り着き、惡洒落として揚屋へぎれと引き止めた意。謡曲・景清の文句を應用して、客を三保谷、仲居清を女景清といひなしたのである。

備中鉄

(國性爺) 照手鐵に似、三本或は四本の長い鐵釘があつて、土を掘返し水田をかくに用ゐる。



ひつばりだこ

道具が下れば嫁人がある、嫁入があれば清十郎は引張風、何と此處が談合(歌念佛) 清十郎引張風にならうが(鹽鮭) ならうが、世か泥の海になるとても一文も銀は無い(歌念佛)

ひつめる

「ひすめる」を見よ。 *ひとあきびと 人商人猿鳥の惣太とて(鰯田川) 「人商人」他人の子を奪ひ去つて賣買する惡漢。誘拐人。謡曲・鰯田川に、「獨子を人商人に誘はれて」

*ひととおき

人置の縁を求め、今日始

めてこの里に唐琴といふ浮名を取る(蛭合戰) 「人置」人置駒をいひ、遊女奉公の口入を業とする女。蛭遊笑覽(或開附録)に「その頃(元祿)人置かといへる者あり、今いふ女術なり、これは年よれる女二人入してありけるよし也云云」

ひとかしら

あれ(大名のひと)かしら・瓜核顔の旦那殿、東寺から出た人さうな(丹波興作) 「一頭瓜十個を一頭といふに、十人はかり連立つたのを一頭というて瓜の縁語を用ひ、瓜核顔とかきつづけたのである。雍州府志(貞享三年刊)巻六、土雁門上雜部に、「倭俗に瓜十個謂一頭」。この文につきては「とら」を見よ。

ひとときのまじ

地名部「すまのひとときのまじ」を見よ。 *一言主の神、この葛城は一言主の神の靈地(浦島) 大和國葛城山葛城神社の祭神である。舊事本紀に、「葛城一言主神座後國葛上郡、是素盞鳴命神子也矣」

ひとごし

さりなが殿には今一ごしあそばしお入あるど(宵庚申) 等一度鷹を放つこと。鷹匠の拳か鷹を放つ故に拳とちふ。

ひとそはえ

口で言へば人そはえ、先立つて埒あげうと、取付く脇差おし止め(丹波興作) 人の側へ寄付いてあまえること。「そはえ」は側を活用した語で、側へ寄付いて戯れるをらふ。枕草紙に「えもいはす興ありと思ひたるを、そはえたる小舎人童などに引取られ泣くを、をかし」

*ひととだま

あれこそは人魂よ、今宵死するは我のみと思ひしに先立つ人もありしよな(曾根崎心中) 「人魂」人の死する時まづ靈魂その身體から脱出し虚空に飛去るをいふ。蓋し機火の空を飛ぶを人魂と稱したものである。和訓栞に、「ひとだま、人魂也、人極死則魂入於地、隨即強之狀如懸珠」。更科日記に、「この腕にひみじくおほきなる人魂のちて京さまへなむ来ぬ」。

*ひとつがき

半切紙に一つ書き、十女一分五厘、野崎の割付、五月三日とばかりにて(女殺) 臘月にも見違へぬ吾妻が筆、仔細らしい一つがき(露門松)

*ひとつがひ

一つ買さへ知らぬ身で、及ばぬ雲のかけ橋の、端傾城でも廻さんとば真に厚い而の皮膚が磨、身も昔は長う短うどらなさいて、殿が大盡だと言はれて釣屋形にぶち乗つて、一つ買をもした者でおんちやり申したさ(加増曾我)

*ひとつ成る口

春を重ねし雛男、一つ成る口ももの酒(曾根崎) 酒を杯に一杯位は飲める口。この文は「一つ」の縁から百をいひて、「桃の酒にいひかけ

たのである。浮世親に質元文元年刊巻之三、酒を樂しむ賢人親父の條に「酒をまわり習ひて樂みなしたまへと、ひとつなる口から酒を讀めたる語を引出し」。好色澤藏・卷之五に「ばいなるくち」とも見えてゐる。異林子の冥途飛脚に「それそれ何と地體一つはなる波瀾様」とあるは、一つはなるに彼名の喝渡瀨をいひかけて、喝渡瀨が一つなる口であるをきかせたのである。

ひね 参る氏子は二つ三つ、また一つ身の縫上げに(烏帽子折)帷巾の布帛で仕立て背に縫ひなく、二歳の常兄の著物。

出入 「いでいり」を見よ。

人麩の垣ほの柿 (三國志(文武五人男) 昨夜物語に「石見國田村庄小野といふ所に八九の社あり、社家の園に柿あり、氏姓柿木の根さしとりへり、筆柿なり」と見えてゐる。「拾ふ木の實は何ぞ」を見よ。

*ひとみこく 年毎に人身御供を受け給ふ(實古教信) この身も今まで勤め、面白からぬ輕薄酒に氣が盡きて、禿を代りに人身こくやつと外した(扇八景)

ひとむくろ 誰に恐れもなき喚く、女心のひとむくろ思ひやられて哀れなり(女護謄)

ひとむくろ(一向)ちちび(一途)「むくろは「かたむくろ」「むくろ腹」などらふ「むくろ」と同じ語で、むくつくことの義であらう。

ひとむくろ ひとむくろ、ひとこ、ひととも

じ(重井筒) 八百屋萬をひとむくろに半兵衛といふ名にも似ず、ただねぶかくとも思ひつむ(香庚申) 「一文字」ぬぶか。ねぎ。徳頭屋本節用集に「被」日本釋名に「ひとむくろはき」の一字ゆゑ也。

*ひとよぎり 寒竹の一節切、戀衣といふ手なばおし返してぞ吹かれける(三世相) よそのつられも我が命も、一よぎりなる憂節や(永明日)

「一節切」竹の節一つこめて切つた笛で、尺八の小形なものである。その長 「一節切」短五種あつて元祿寶永頃最も流行した。

*ひながた ひながたに間をあらせ、くしがたを殿殿と雙眉つけて(烏帽子折)

*ひなは せめて煙草のみたやな、煙管火繩は懐中す(卯月巻) 心やばらか徳頭や、菓子に火繩に番附と、賣る聲にまで節籠る(三枚巻) 火繩よ玉よと粹めきける(國性巻)

「火繩」機肌または竹幹の肉を叩き碎き、或は本綿絲を捻つて繩を作り、これに硝石を吸收せしめたもので、火を點じ燃らし、火繩筒(鳥籠)の火に用ふ、又煙草を喫するに用ひたるのを煙草の火繩と稱した。雍州府志に「鐵炮火繩所有之、多削取志濃竹施皮、綯之云云。」

ひなをとこ 焦るる胸の平野屋に奉を重ねし雛男、一つなる口ももの酒(會相巻)

「雛男」雛人形のやうな美しい男。東海道名所

記(萬治元年成) 一に「年のころ二十四五なる男ただ一人、刀わざしは腰に、こたへけれど、けたれてなまるき色の白きひな男なり。」

ひなんさう どうでも權三は好い男、誰ひばやらす美男草(權三)

「美男草」五味子とも書き、ひなんさうとらうとらうかづらなどともいふ。常緑蔓性の木本で、葉は厚く平薄で光澤を有し、その形楕圓形鋭尖頭である、七八月頃淡黄白色の五瓣花を開き、果實は小球の集合より成りて紅熟し直径一寸ばかりある。増補御書集覽に「ひなんさう。出雲の方言にてとらうを云。」異林子の此文は美男を美男草にいひかけて、それらの草を以て「飼ひに飼うたる月毛の駒」と、後の文に續けたのである。

*ひにん ハテナんにも無いもの、非人がな通つたか(官宦) 私一人を頼みの母様南邊に賃仕事して裏家住み、死んだ後では袖乞非人の飢死もなされうかと、これのみ悲しさ(天網島) たとへば治兵衛乞食非人の身となり(天網島) 非人の女房にはなほならぬ(天網島)

「非人」人中に幽せたる人の義か。但し和訓栞には、「ひにん」俗に乞食をいふ、貧人の義也、非人の義にあらずと見えてゐる。非人はまた小屋の義ともいひ、乞食の徒であつて、賤民の一種。江戸時代では非人と穢多とは別で、穢多は獸皮を製するを業とすれども、非人はさうことをしないで乞食または復讐り路傍の興行などをなして生活し、公役として捕手の配下で罪人逮捕に助力し、牢番、罪人引廻しの護衛などを勤め、死刑執行の時には其難役、跡片符等の事に従つた。明治四年八月非人の稱廢されて平民となる。

非人敵討 今の間に御器さげて心からの非人敵討、こそぞでそ(二橋) 橋の下新七は居やろぬかと(渡邊)

元祿頃大阪の名徳丸木與次兵衛の當り親であつた歌舞伎狂言「非人敵討」福井彌五左衛門作)をいふ。この狂言は香藤治良右衛門、同新七の兄弟が非人となつて敵を附け狙ふ芝居で、元文元年に文楽堂の作つた敵討狂言錦は、この非人敵討を浄瑠璃に作つたものである。

異林子の此文は、非人敵討の芝居は當時名高かつたため、これを勝二郎のものと手代新七に當てて別題したのであつて、こそぞでそらの橋の下新七は居やろぬか、は、荒木與次兵衛の橋を傳へたものである。

*ひぬか 美濃路まで隠れもないひぬかの八藏、目の荒い男知らぬか(丹波與作)

「乾襦袢いた妻態をいふ。異林子の此文、妻態は米糶よりも目が粗いから、八藏の渾名を乾襦にして、「目の荒い男」というたのである。

*ひね 煮ても焼いてもひねくさい三年米(千正次) 飯は赤まじりのひねくさいをすつくりと焚かせ(香庚申) ぼんぼり給もひねくろしく、背中に皺の寄るべなき(女腹切)

「陣和名抄に「映稱、比稱」と見えてゐる。蓋し、經經の義か。古きこと。舊穀を「ひね」といひ、物の舊きを「ひね物」といふ。

「ひねくろし」は古異られた意。古めかし。遊女をいふやうにぼんぼり綿を被て、老成ぶるをいうたのである。

「顔ひねて」は顔の老成ぶるをいひ、「ひね」を活かした語である。

*ひねりもち 又捻餅食ひたいか
(會稽山) 捻餅の味忘れな(會稽山)
〔捻餅を握ることをいふ。蓋し餅を捻るに
喻へた語である。〕

ひのあし まだ日の脚も南へと、駕
籠の息枚息つがず、走りせてこそ
急ぎけれ(卯月紅蓮)

火の印 覽字の祕文を線掛け線掛
け、火の印を結んで祈りければ、
空に一點の雲もなく(嵯峨天皇)

火の印 覽字の祕文を線掛け線掛
け、火の印を結んで祈りければ、
空に一點の雲もなく(嵯峨天皇)

火の印 覽字の祕文を線掛け線掛
け、火の印を結んで祈りければ、
空に一點の雲もなく(嵯峨天皇)

火の印 覽字の祕文を線掛け線掛
け、火の印を結んで祈りければ、
空に一點の雲もなく(嵯峨天皇)

火の印 覽字の祕文を線掛け線掛
け、火の印を結んで祈りければ、
空に一點の雲もなく(嵯峨天皇)

火の印 覽字の祕文を線掛け線掛
け、火の印を結んで祈りければ、
空に一點の雲もなく(嵯峨天皇)

火の印 覽字の祕文を線掛け線掛
け、火の印を結んで祈りければ、
空に一點の雲もなく(嵯峨天皇)

火の印 覽字の祕文を線掛け線掛
け、火の印を結んで祈りければ、
空に一點の雲もなく(嵯峨天皇)

野邑名也、今上州安中松井田富岡之編爲上
云云。)*火の車 火の車業障の雲に轟
轟(驅丸)
罪人を乗せて地獄に運ぶに用ゐ、火烙に包ま
れた車である。智度論、十四に、「於王舍城
中、地自然破裂、火車來迎、生入地獄。」

*畫の御座 帝よりは畫の御座の寶
劍を枕刀に置かれしとき坐(松風)
天皇畫間に出現なされるしゆ坐し給ふ御座
で、清涼殿内身舎にある。畫の御座の南端に
劍(鞘を東にし、柄を西にして)を備へ置か
れた、この劍を畫の御座の寶劍といふ。

牌の臙 牌の臙強き大音にて、こり
やびりめ(酒吞童子)
胃の底部の外側に位置する内臟、牌の臙強き大
音」とは、丹田に力が入った大音をいふ。力
ある臙底から出る大音聲。

*ひのみくら 殿上畫御座夜の御
殿(張袖造)
〔畫御座〕ひのおましと讀むがよし。「ひの
みくら」を見よ。「朝拜殿」に尋ねば云云を
見よ。

ひのもくだいらり おり位の帝日の
もくだいらり、王は十善神は九
善(大經師)

〔檀の木内裏〕の義か。歌曲時習考には「日の本
内裏」にしてある。翁草に「正月に來る萬歲
の唱歌中古の響多きこゆ、されども頗る片
言にて解し難き事多し」とある。

*ひばり (聖女)
〔聖雀毛〕馬の毛色の名。黃白の雜毛。和訓栞
に、「馬のびり毛は驪をよめり、又青ひば
り、白ひばり、鹿毛ひばり、葦毛ひばり、月毛
ひばり、赤毛ひばり、黒ひばり等の品あり」

ひばりのとこ 雲雀の床の芝
つなぎ、ただある處に乘しづ
め(小栗判官)

〔聖雀毛〕雲雀の臥處の義。「くまむら(薔)を
いひ、薔の床といふの類である。詞花集、冬
の部、曾根好忠の歌に「根生ふる濯邊の孝原冬
來れば、聖雀の床ぞあらはれにける」

*ひばりほね 妹尾が心は上見ぬ鶯、
攫みかかると俊寛がひばり骨には
つたと蹴られ(女護國) 何面日も七
十路に生き過ぎたりや此命、官位
を賜はり子孫の名も雲井に揚れ
ばりばり、瘦せたる膝節高養
げ(松風)

〔聖雀骨〕脆弱な骨格を聖雀の脚の細いものに
喻へた語。巢林子作天神記に、「聖雀のやう
なる腕先に大の男が眞仰に地響打つて打倒
され」

*ひひらぎ 柎に鬼も恐るる鯛の
頭(聖女)
鬼も來るなとひひらぎ
や(重井筒)

〔柎〕木屑科に屬する植物、萼厚く常綠で、末
端に針状をなす大形鋸齒があるによつて、疼
木の義によつた名。鯛の頭を見よ。

ひば 且那が妣母第七年に當りし
故、御當山に石碑を建て(萬年草)

〔妣母〕亡母。死の義。禮記曲禮下篇
に「生曰父母、死曰考曰妣」

*ひまぜ 武士は弓矢に怠らず、日ま
ぜ日まぜのお鷹狩(奇虎申)

〔日交〕隔日。十六夜日記に「わかわかしまわ
らばやみにや、日まぜにおること再びにな
りぬ」

*ひまぢ 一昨日のお日待に法印様

の相伴で善哉餅を十三杯、それが
ら身持になつたやらばてれんぢ
や(萬年草) 一昨年の九月庄屋殿の
日待に骨牌打ち(嵯峨天皇)

〔日待〕日祭の義。正の五、九月の中の日をえ
らび、夜遅く待つて日の出を待つて拜する事
也。日次紀事、延寶年中戌正月の條に「凡
踐正五九月詣吉日、主人齋戒沐浴自暮至朝
不少廢、其間親戚朋友聚其家、雜遊令朝
主人睡、或謂僧侶除陽師令誦經咒待朝
日出而獻供物祈所願、是謂日待」。同
書五月十四日の條に「日待。俗間多今夜至三
明朝修日待」。心中萬年草の文は、法
印様がお日待の讀經に、檀家から招かれて行
つたのである。

ひまはし 引裂紙のひねり元結で火
まはした、火の字、日野絹、房様
なんど、わしは獨寢(重井筒)

〔火廻〕紙燭に點火し、頭に「ひの音ある語を
唱へて次へ紙燭を廻せば、次の音も亦かくし
て次から次と廻し、言詰つた際紙燭の消え
たのを預とする遊戯である。但しこの文は
紙燭の代用に引裂紙のひねり元結に點火した
のである。蜀山人編、一話「一言に、「火廻しと
いふは冬の夜、埋火の本なをいふ淋しの
趣に、紙燭に火をつけ、頭に火といふ唱の物
の名などいひて、紙燭を添へて次へ廻せば次
もまた送り送り、ひつまつり紙燭の消えた
るを預とする」。火廻の遊戯は當時遊女間に流
行したもので、醉翁軒宸地堂撰、新好色文枕
〔正徳元年刊〕の巻、名波屋三七が遊女遊の
條にも「やたい心も弱弱しと引寄するわけ交
に、遂にもえがひ火まはしと、ひひんす、ひ
むく、ひぢりめんきやふ、ひたすら通ふ身
となりぬ」と見えてゐる。

*ひめはし 新枕せしひめ
始(大經師)

ひめはし 新枕せしひめ
始(大經師)

ひめはし 新枕せしひめ
始(大經師)

ひめはし 新枕せしひめ
始(大經師)

ひめはし 新枕せしひめ
始(大經師)

ひめはし 新枕せしひめ
始(大經師)

ひめはし 新枕せしひめ
始(大經師)

ひめはし 新枕せしひめ
始(大經師)

古語上の語である。大經師菩薩のこの文は、
垢の義に取つて、房事をなはしめる日の
意にしたのである。鶴峯戊申の海西漫談にも
房事を行はばある日の意に説いてある。但し
この語義については諸説まちまちである。
安齋隨筆・卷之四に、「垢はじめと云ふ事、
その名出でたるのみにて、何の事と云ふこと
古記實録に見えず、後代の人書に説話區區
にして皆出所なき推量なり」

*びもく 御邊が如き朝敵に出合ひ、
首取つてそれを眉目として兄頼光
頼信の心を柔らげ(關八州)
[眉目]眉目。太平記卷七、新田義貞に頼信を
賜ふ條に、「頼信の文章、卷々眉目に備へつべ
き繪言なれば、義貞斜ならず悦びて」

*ひもの 指物屋より指物屋の、曲ら
ぬ木竹捻ぢ曲げて(用明天皇) 塗師
屋 指物屋・指物屋(用明天皇) 塗師
[指物]指物で作つた薄い絹物をいひ、轉して
絹物を云ふ。和訓栞に「ひもの。絲襪を云ふ。
指物の義、それをさするものを指物師といふ」

*ひや 息が出ずば火屋(やれ、そん
なら火箸で焼いてのけ(重井筒) 渡
れば色町、越ゆればひや、濡にも
憂にもよううつるは扱(女)
六十に餘つて、火屋へ片足踏込ん
で(歌念佛)

〔火屋〕火葬場。茶里所へ渡れば色町、越ゆれば
火屋」とは、梅田橋を渡れば娘川の堂島新
地遊廓、越えれば梅田の火葬場墓地なればい
ふ。「火屋へ片足踏込む」とは、壽命のいくら
もない意で、棺桶に片足踏込むの類。

*ひやうごさきり 兵庫 鑲の白銀
作(酒吞童子) 太刀は鳥首兵庫ぐさ
り、ムムこれば大将の拂物(女備)

〔兵庫鑲〕鑲裏に武器器具を納め置かれる御鏡
を兵庫といひ、兵庫寮内にある。その兵庫寮
に兵具を作る者があつて、その者が作つた帶
取(鑲の鑲をもつ)といふのをいふ。兵庫鑲
は切れないといふので珍重した。

*ひやうぢやう 右大辨早廣兵杖二
三十此處彼處と搜し來り(鶴丸)
〔兵杖〕兵具のこと。太刀弓箭の類をいふ。隨
身は太刀を佩き弓箭を持つ者だによつて、隨
身を兵杖ともいふ。

*ひやうてう 琵琶取出し盤渉を平
調にいら(か)(鶴丸)
〔平調〕二律。調の名として用ゐる時は
この音を管音(樂の調)として音階を構成
するもの。

*ひやうどうだゐ 百日曾錢(鶴池)
〔平等大慈佛の法華經を説かれた實智をい
ふ。能く平等の理を證し、また衆生等しく智
慧を得ればいふ。〕

ひやうまつく 申し殿様、女なれど
も皆御譜代相傳の者の妻、諫言申
すがお氣に入らぬかひやうまつく
たる御言葉正正 兄弟子甲斐に
此方から手本を出して見せ申さん
と、いふ心のひやうまんづき、
これ御覽むと走り(唐船新)

ひやうもん びやうもんの唐衣に唐
縫したる柳裏、ひらりと脱いで賜
ひければ(龜明寺殿) 夕紅の緋絨の
腹巻ひやうもんの練貫に唐縫した
る上重ね(兼好)

〔狂文〕平文などと書いてある。紋をいろい
ろに色取たることをいふ。安齋隨筆卷二
十二に「ヒヤウモン。衣服の文にヒヤウモン
と云ふ事古語にあり、文を三四色にも色色様
様の色にいろとりたるを云ふ。是は豹の皮は
まだならぬ故、それになへて云ふなり」

*びやくがう 出山の釋迦牟尼 佛四
八の相好八十種好、白毫の光明は
山河草木六道四生人の面しるじろ
じろと見ゆ(鶴池) 觀世音の白毫
は籠置きたりと披露せば(天織冠)
〔白毫〕佛菩薩及び轉輪聖王の有する三十二相
その條を見よとの一であつて、兩眉間に白毫
があつて常に光明を放ち、清淨柔軟にして兜
羅綿の如きのたゞいふ。觀無量壽經疏に、
「如來眉間有白毫相、如珂雪、長一丈五尺、
毫有八、楞圓四寸、其毫中空右旋、婉轉如
琉璃筒、從此發光無量國」

びやくくわりゆうわう
「こまがたごんげん」を見よ。
びやくこれきせつふう 臣が病は白
虎歴節風とて(唐船新)
〔白虎歴節風〕「れきせつふう」「ふうしつ」を
見よ。

びやくじゆつ 誓文白朮和中散、身
を粉薬に御奉公(薩摩歌)
〔白朮〕古名ををけら」といひ、山原原野に自
生する草本で、秋の
頃葉の頂に類に似た
白花を開く。現今も
漢藥肆店で販賣され
造薬粉の代用品として
用ひらる。新撰字鏡に「白朮 介。「誓文白
朮」は「誓文白朮」(びやくくわい)を見よに漢
藥草の白朮をいひかけたのである。



〔朮白〕

*百二十里 小萬・小女郎・小よしと

て百二十里の名取ども、人呼ぶか
た手の袖の下(丹波興作)
京都三條大橋から江戸日本橋まで約百二十里
ある。以て東海道全程にいふ百二十里の名
取」とは、東海道にその人ありと世の人に知
られた者はいふ。

*ひやくはち 腰にしきみの淺緑、み
な水晶の百八と、水の白玉光り合
ひ(兼好) 手に百八の玉の緒を、泪
の玉の緑まぜて、南無あみ鳥の大
長寺(実細龜) 道芝の露を繋ぎて、
百八の結目合せて總つつけて、袂に
繰らん法の道(女備) 百八の菩提
樹ならで御身に添ふる物はなし
〔最明寺殿〕 抹香の香きづまりさ、
あくびは百八煩惱菩提、いつそお
山に宗旨をかへ(女備) けたいも
なしの金造ひ、百八日目の眠りざ
まし(扇八景)

〔百八〕百八は百八の珠を聯ねて造れるもの
を正規とす、蓋し百八煩惱を滅盡する爲に擲
んだ歌である。
〔百八の菩提樹〕は、菩提樹で造つた正規の歌
珠をいうたのである。
〔百八煩惱〕は、佛法で人心の迷妄の種類を百
八の歌に分つたもので、即ち六根(眼、耳、
鼻)が六塵(色、聲、香)に對して三十六の煩
惱が生じ、更にこれが過去、現在、未來に亘
つて合計百八の煩惱がある。
〔百八日〕は、百八煩惱をもちつたのである
。「もんび」はその條を見よ。「まつ初夜」
太鼓を打つ時は云々」を見よ。

びやくびやく 親方殿も聞きな
れ、びやくびやく 客はしな

びやくびやく 親方殿も聞きな
れ、びやくびやく 客はしな

【吉岡築】
「びやくびやくらいら」とも「びやくらいら」
「びやくらいら」(白癩白癩)の略。「びやくらいら」
を見よ。松の落葉(元祿十七年刊)「びやくらいら」茶の
湯の眼に「びやくびやくらいら誰がまことよ
嬉しからうらん」。

*ひやくまんべん 百萬遍の御回向
より聞入れたとの御一言、智識長老
のお十念を授かる心とはかりに
て(香庚申)

【百萬遍】僧者連坐し大數珠をつまぐりつつ、
百萬遍の稱念念佛を唱へることなり。蓋し
念佛百萬遍に滿つる者は往生(を得るといふ)
つたものである。如才淨土論下に、「念佛
一心不亂、得百萬遍已去者、定得往生」。

*びやくらいら 愛宕白山堪忍せぬ、び
やくらいらいきかめと聲聲に(加増曾我)
こりやこりや亭主何と奈良茶は食
はさぬか、但し人をなぶるかびや
くらいらいきかめと腹立つる(天織冠)

ひやくらいらいきかめと聲聲に(加増曾我)
こりや何處へ連れて行き召すぞ、
びやくらいら返してくれられ(女護身)

【白癩】天刑病即ち癩病である。神佛の冥加に
盡きた者がこの病に罹るといふ迷信よりし
て、偽るに於ては白癩に罹る法もあるの義に
て、自誓の詞に用ゐられたものである。室町時代の
起請文には、白癩黒癩とつづけて書いてある
のが往在である。令義解二に白癩を註して、「此
病有、過食入五臟、或眉睫墮落、或鼻柱腐爛、
或語聲啞啞、或支節解落也、亦能注三塗於傍
人、故不可三與人同床也、癩或作癩也」。

【四脚八苦事】(水縁九年の經本、奥書云)に、
「白癩」といふ病は眉の毛ぬけ、鼻柱倒れて親

子と雖も近付く者なし。
ひようじ 曙近きひようじの
聲(反魂香)

【ひようじん】(火用心)の略。かく「心の略ま
れることに就いてはさだこの條に述べて置
した。「ひようじ」は夜廻り番太郎(はんた)
を見よ)の叫ぶ聲である。

*ひよく 熊野の牛玉の群鳥。比翼の
誓紙引かへ、今は天罰起語文(天網
鳥) 比翼の鳥の片羽が(比多) 比
翼煙管の薄煙、霧も絶え絶え晴れ
渡り(冥途飛脚) 幼な馴染のこち女
夫、比翼連理の中はよし何に不足
は無けれど(卯月調色) 比翼の羽
子板・木樂子も磨入りては色にな
る(靈門松)

【比翼】翼をならべて飛ぶ鳥の義。以て夫婦の
契の親密なるに喩ふ。白居易の長恨歌に「在天
願作比翼鳥、在地願為連理枝」。

【比翼の誓紙】とは、遊女小春と紙屋治兵衛と
が互に夫婦となるを誓うて、誓紙に書いて取
かした證文をいふ。

【比翼の鳥】に就いては既に述べたが、なほ和
漢三才圖會・山鳥類・比翼鳥の條に「三才圖會
云、南方有比翼鳥、不比不飛、謂之鸞鳥、
似鳥而青赤色、一目一翼相背也」とあつて、
二鳥合體で飛んでゐる翼が載せてある。

【比翼煙管】とは女夫共用の煙管をいふ。元祿
頃、同一の雁首で吸口が雁首の所から二つ
の煙管といふ洒落たものがあつて、大日本史
料慶長十年の條にその古煙管の圖が載つて
ゐる。

【比翼連理】とは夫婦の契の親密なることをい
ふ。「れんりのまきり」を見よ。

【比翼の羽子板】とは、男女の戀愛に縁ある一
對の羽子板にとりなして、色町にふさはしう
ひなしたのである。

*ひよん 忘れてたもののひよんな
事、母様ゆかしうござんす(生玉)
ひよんな話を聞きさいて(薩摩歌)
なう大夫様ひよんな事が出来まし
た(錠餅) 死にやるわいの、アアア
アひよんな事、サアサアサどうぞ
助けて天網鳥

【凶】凶な意にいふ。悪意し。變。この語は
狂言記・抜段の中にも見えてゐる。現今も岐
阜縣加茂郡東白河村地方では、不思議な意
に「ひよんな」といひ、中國地方でも「悪意し
」の意に「ひよんな」といふ。凶變の義で
ある。新井君美の說に「俗に物の不好事を凡
てひよんな事と云ふ、凶子の華音ひよんと云
ふよりいひ傳へて常語となれり」。

ひらぎ 目塞ぎ鼻撮み柵屋にこそ入
りける(酒呑童子)

【柵】この文は、小兒が戯れに柵の葉の尖れ
るを眼撮みたるに當てて、目塞ぎ鼻撮み
にするから「目塞ぎ鼻撮み柵」を柵屋にか
けていふたのである。

ひらきあきらひ
開扇は浅利の
與市(五人兄弟)

【開扇】扇を指す。舞の本に「あ
きらひ」とありてこの與
市はあきらの與
市とありてこの
紋繪が載つてゐる。

*ひらく 心ならずも判官は都を開
かせ給ひける(吉野忠信)



【きふあきらひ】

【開】在時武士詞であつて、「落つ」といふを忌
んで開くといふ。謡曲忠信に「とにかく
に我は夜に入り此所を開くべし」。

ひらくに夜 我が身のさとりひらく
日(大經師)

*ひらくび 手綱取る手も覺えなく
平頭に抱附く(靈明寺殿)

【平頭馬】の首の側面。著聞集十に、「已が馬
の手綱おもがらをおしはつして、平頭をうち
てけり」。

ひらくら 弟の善次郎は兄に浴せ
て銀盗み、所所のひらくらな仕舞は
んと、この所へ來りしが(二枚袖)

【確】確かな事なくひらくらひらくらして、其場
道に支拂はないで其儘にしてゐること。「ひ
らくら」は「ひらくらひらくら」の意で、右往
左往の不審なことをいひ、「ひらくら」は「ひ
らくらひらくら」ひらくらひらくら」などと同類
の語である。この文に「浴せ」とあるは、
善次郎が盗んだ罪惡を兄にあぶせかけた意で
ある。

*ひらくら ひらくら一筆遊ばせと、
床の硯の墨すり流し(偶田川) 入ら
る世話の焼物口、ひらくら御無
用(偶田川)

【平更】まつばら(眞平)「ひらくら御無用」
は、平更に平皿をいひかけたのである。

ひらくら いかにも男を持つたと
て、若い姿してひらくらやと、あん
まりはたえさつしてひらくら(卯月紅葉)
ひらくらとなまめいた貌、靡きげなだ
つぽい貌。「ひらくらひらくら」といふ。女大

名丹前能(元禄十五年刊卷三)に「能書とは見
えながら、びらしやらと書きながしたる筆の
跡、讀みつけざれば持あかす。珍著遊林
子詠集編(元禄九年刊)人に「東來西來」の書言
字者節用集、言辭門に「びらしやら」東來西來
右行左行。俳言集覽に「びらしやら」ヒラ
リシヤリともいふ、俗に東來西來、又右行
左行を用ふ。

ひらなか

「びらひらなか」も「びらひらなか」を見よ。

ひらのこんにやく 平野菟蕪、ひし

菟、ひらのやゑきやう、肥後芋
莖(重井筒)

「平野菟蕪」播州住吉郡平野から産出する菟蕪
は佳品なるによつてこの名がある。播陽群談
に「住吉郡平野莊の田圃に作り、則ち當所の
市店に於て製之之所に送る、味他に勝て宜
し、因て之を作り商ふ者總て平野菟蕪と云
へり」。

ひらのやゑきやう 平野菟蕪、菟

莖(重井筒)

當時大阪北久太郎町堀筋平野屋に賣つてゐた
淫聲の名であつて、房事に快味を促進する女
悦散の類のもであらう。「ひらのや」は平野
屋であるが、「やゑきやう」は會興の音寫か、或
は何か假名を誤つたのであらう。

*ひらはり 右近の馬場に平張つた

世(天神記)

「平張」平に張つて日被ひとする天幕。箋注倭
名類聚抄に「平張曰苧、比良波利。比良波
利即平張之義、調上平、不與阿計波利之
有種同也」。

取る(弁筒) ひらひ三番續け
勝(弁筒案手河内通)

「拾」ひらひともいひ、相手を選ばず、来る
者は拾つて相撲のこと。この語動詞としても
用ひる。義経後集(交祿五十年)に「世に勝れ
たる大相撲といへばひらひける程に、世の人
は是た大善にあるまじと恐れ慄き、奇代の事
と沙汰しけり」。

*ひらりしやらり 花紫を戴いてひ

らりしやらりの町風も、帽子に漏
る衣の香の(酒香重) 濡一通の状
文なら、恐らく私が一筆で、叶は
ぬ戀も假名書き筆、ひらりしやら
りのかすり墨(堀山堤)

「ひらしやら」同じ、その條を見よ。傾城酒
香重子のこの文は「ひらり」に「ひらり帽子」
をきかせ、堀山堤のこの文は、宛轉嬌治な筆
致の形容である。

*ひらりはらし びらり帽子に加賀

菅笠、大振袖の後帯(卯月調色) わ
しが顔よりこなさんの、肌これ
なと風防ぐ、ひらり帽子の紫や、
色で逢ひしは(その條を見よ)ともいふ。

「むらさきばうし」その條を見よともいふ。
この帽子は左右に垂れ、もとと纏るよりの
名で、女が多くは笠の下に被つたものであ
る。「やうらうらし」の條を見よ。

*ひらを (松風)

「平緒」と太刀の帯で平たく組んだ緒であ
る。後世の平緒は長さ二尺餘、幅二寸許で、捻
絲で組んだものに色絲を以て種種の模様を刺
繡し、太刀の帯と別に於て前へ垂したもので
ある。その垂れたる部分を垂といひ、もとは
一筋に續いたのを前で結ひ垂したものであつた
が、後に切つて別にしたのである。但し至幕

の御料は近世まで續き平緒であつたといふ。

*ひらんば 汝が信心一天下に知ら
せん、我慢に灯すら高燈なれば、汝
が一念らんばひらんばの惡風と
なつて萬燈を一時に打消し(釋迦)
前へ走ればらんばふう、後へ戻れ
ばひらんば風、煙は咽に息切れて
泣けども聲の出でばこそ(釋迦)

「吹竈婆」または「吹竈婆風」は毘藍風或は釋藍
といひ、も梵語 Vairavahaka、迅猛風
と譯し、暴風の名。惡死音義、上に「毘藍風」、
正云吹竈婆、吹者散也、竈婆者所至也、音
此風所至之處悉皆散故也、又云毘者不也、監
婆者連也、謂此風行最速迅急也、落動若迅
猛風「是也」大智度論に「八方風不能動三
須彌山、隨風風至碎如塵草」。

びり ころりびりめ、この長が日頃
の手並を知りながら、今から野太
い根性さげ(酒香重子)

「しり」(後「尻」を「ひり」びり)と訛つた語か。
人を罵るにも、又博奕にも用ひる。松の葉・
巻四、草摺引の歌に「ひり國太子はかた王」。

ひるがね 兵庫鎮の白銀作り、筋金

蛭金鑄の金返り栗形うらがは
し(酒香重子枕書)

「蛭金」蛭巻の金。なほこの文にある「兵庫
鎮」はその條を見よ。「栗形」とは、下緒を附
ける爲に、刀の鞘に附ける栗の形をしたも
の。木原盾臣編「古兵器圖解」刀劍部に「栗形
」の鞘木地ならむには必筒金に附て作る也、ぬ
り鞘などには牛角などにもつくること今と
おなじ、此を栗形と云ふは其形栗に似たれ
ば也、さて此物を用ひるにも放れがたく作ら
べし。裏がはらはは、裏瓦して、刀の小刀櫃の
所に横に入れる角又は金鑄製の飾。

ひるがんだう ひるがんだうよ追剝
ふ出合へ出合へを力にて、皆散り
散りにぞ逃げにける(龜)

「畫強盜強盜は唐音(Chiang-thao)を傳へ
た語であらう。

*びるしやな 佛法にては本有の毘

盧遮那不動明王の受取り給ひ
て(釋九) 本地釋迦如來毘盧遮那徧
一切處の御形(龜德本)

「毘盧遮那梵語 Vairocana、譯して光明徧
照又は徧一切處或は大日徧照と云ふ。煩悩の
暗を照して智慧の光明の法界に徧照する義
で、大日覺王如來のことである。

*ひるまき 身の好いたる細工槍手

並を見よと、蛭巻よりかつしと切
つてぞ落しける(堀川波鏡)

「蛭巻」槍長刀の柄若くは刀の鞘を金屬又は
藤にて間を隔てて巻いたもの。平家物語考
證、けうくんの事の條に「銀のひるまき。補
按るに盛義記にも所々蛭巻したる長刀といふ
事あり、銀を以て其柄を飾る蛭の纏へるが如
し、よつて云か」。

*ひれ どこやらひれある骨柄の太

刀刀のさしこなし、下に置かれぬ
見所あり(源義經) 譏りし人に羨ま
せ、男にひれを付けうぞと思つた
こと(今宮) 音羽二郎三を雜喉場と
は、ひれがあるとの譬かや(今宮)
唐土の望夫山・吾朝の領巾振山
(國姓巻) 白縮細の紵帯、これも二
人が申し受け、長き形見と身に附
けん、我も受取る受取れと、位牌
のひれに結び付け(卯月調色)

銭取つて濱へ行く様な者ぢやござんせんとてひんとする(最明寺殿) 池んだ物の流るさまにふ。氣張る。

*ひんぬき あれあれあそこへ頷うて来る本小室のひんぬきは、興作と小手招き(丹波興作) 段襖様の染被・供の女が頬冠、御所のひんぬき二人が中へ怖氣もなくしやんと分る(酒吞童子)

「ひきぬき(引放)の音便。拔草。純粹。秀逸。中分無きこと。義經千本櫻第二に「夜半には雨もあがり、胸方には朝風にかはつて、佃出船にはひんぬきの上上白痴。」

ひんばくわ アレ類婆果の唇が動くは人に告ぐる氣(聖徳太子繪傳記)

「類婆果果樹の梵名、Bimba。譯して相思といひ、其果林檎に似る。慧苑音義下に「類婆果、其果似此方林檎、極鮮明赤也。」

ひんび 過ぎ逝かれし親父の咄に、鼻紙ひんびと遣ふ者は曲者ぢやといはれしが(冥途飛脚)

けちけちなしいこといふ副詞。ばつば。どつさり。

ひんびしゆ 茂兵衛は早天より、唇配りて先き先きの、ひんび酒の麴の花、ちろちろ目に立歸り(大經師)

「美酒をひんび酒と調子づけていらたのであって、「こり(麴)を「ごんごり」その條を見)とちへる類である。

ひんみつれ この櫛箱に焼物の鬘水入、これ氏神と三度いただし(冥途飛脚)

「鬘水入陶器或は漆物或は竹製もあつて、其

形構面形で厚さ一寸ばかり(寶鏡頌の物は更厚)小判金を重ねたやうな状をなす。これに伽羅油を入れ、或は兩五味子の蜜を細かく削つてこれに浸し置いて、そのねばり汁で毛髪をその形を理め艶を出したのである。鬘水入をその形似てゐるより小判に見立てた例は、既に西鶴撰の好色盛衰記卷二、見ぬ面影に「刑罰より手を出して、鬘水入の底のやうなる黄色の物を、一枚づつ給はりける」と見え、傾城本太神樂寶水二年刊)卷四に「小判は鬘水入の底やう、壹歩は髮落のちぢれたるのをやう、知らぬ顔してみちる女即ち云云」と見えてゐる。三船巻卷之三に「竹のびん水入一、かみそりば二、あつたより持参り候に、あはれ竹の鬘水入もあつた。」

ひんよえい 時に麓の山どよむ木造に法のひんよえい(萬年草) 七尺餘の青目の石かろがると捉げ、肩へ上げてひんよえい(扇八景)

木造目の掛敷、奴が行列道具を振つて裸り行くときにこの掛敷をした。

ふ

*ぶ オオ殿様の御勘當受け、ぶに首打たるる法もあれ(堀川波鼓) 此方も歩を以てぶに首を捉げらるるが悔みはないか(露門私)

「歩」者。斬首を行ふ獄卒。露門松のこの女は將來の駒の歩に獄卒をまかせたのである。番守部撰(俗語考)に、「今の世に夫とも人足とも云物は古くは丁といへり。」

ぶいぶい 坂東者のどう強く、何さぶいぶいども人嚇の腕に色色の彫物して、喧嘩に事よせ懐の物取る(聞き及ぶ安歌)

ぶつみこ不平をいふさま。ぶつづいふ愚鈍者。

ふうしつ 臣が病は白虎歴節とて、白き虎の五體節節食ひ切るに譬(唐船詞)

「風濕風寒濕熱。風寒とは、風氣寒の人體に中り、外方より疾病の因をなすものをいひ、また濕熱とは、人體内に發する熱氣の病因をなすものをいふ。

ふうぞく 月待つ夜半の管絃の御遊。風俗催馬樂朗詠も玉簾ふかき聲もれて(舞合歌)

「風俗」風俗歌の略。國國の歌謡の中に曲調なきを選んで上下の人々唄うたのである。體源抄に「津教訓抄云、風俗は諸國の古風を集むるなり、故に風俗多在二倍馬樂中……維新今様演義之詞、皆是風俗之流也。」

*ふうぶち 人間のふうぶちを捻り殺すは此公時が好物(酒吞童子)

體八めはふうぶちなり、己が胸座しつかと取つて(丹波興作) 人の意見も馬の耳、よそふく風のふうぶちにて、夜歩き日歩きとばし立て(二枚繪)

「ぶいぶい」といふ、その條を見よ。「八めはふうぶち」とは、馬方の名の八に鋒をいひかけ、鋒の羽音のふうぶちをいひかけたのである。「風のふうぶち」とは、風の音のふうぶち

う、即ち馬耳東風をいひかけたのである。ふうりうちん 勝つも負くも風流陣かかれやかれと(國性龜)

「風流陣唐玄宗皇帝が楊貴妃と清華宮に宴し、宮女を兩隊に分ち旗幟をもつて勝負せしめた故事で、これを櫻花と梅花とに見立てて花軍と云つた。天寶遺事に、「明星酒酣、使妃子統宮使百餘人、帝統小使百餘人、排二陣、爲風流陣、巧擊細、敗者即三巨勝、風輪、爲風輪、敵は勇みの鉦太鼓、風輪火輪天地にあふれ、前後を忘じて行き方なく(日本武尊) 風輪の輔風穰かに(唐船詞)

「風輪」天下の四輪の一で、俱舍論十一に「先於穰下依止虛空有風輪生、廣無數、厚十六億踰繕那」と見え、虛空即ち空輪の上に風輪生じ、風輪の上に水輪生じ、水輪の上に金輪生じてゐる。轉じて風をいふ。

*ふえのくさり 三刀四刀刺通し、返す刀に吭のくさりすたすたに切散し(實古教信)

「吭」のくさる。和漢三才圖會卷十二、支體部に、咽喉は九節あり、一、所有結喉、而咽喉管正中故與笛同調、至要之器、史記所謂絕九而死者是也」と見え、咽喉は九節あるによつて鏗といふのである。

*ふかく 堤の彌三が附くからばさまで不覺も取るまじきぞ(酒吞童子)

よい事は無い筈と思はなんだは身の不覺(丹波興作) 鬼の腕を取りかやされ、それが無念な口惜い切腹せうといふやうな不覺人の渡邊

せうといふやうな不覺人の渡邊にて、逢うて何の用もなし(酒吞童子)

「不覺」覺悟の確ならぬこと。油斷。不調法。ふかみぐさ 根は戀草の深見草、あ